

御 挨拶

平成で幕を開けた今年度が、間もなく令和2年の春を迎えようとしています。

大きな時代の節目を越え、Society5.0の社会へと加速する中、教育の分野においても社会の変化を前向きに受け止め、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手として、予測不可能な未来社会を自律的に生き、そして社会の形成に参画するための資質や能力を一層確実に育成することが求められています。こうした社会の変化と併走する教育の変化は、障害がある児童生徒が学ぶ学校である特別支援学校の教育においても同様であり、私たちが教育の質を変化させることは、障害のある子どもたちの社会における存在価値を高めるとともに、社会の望ましい変化そのものに貢献できる可能性があると考えています。

本校が、この長岡京の地に開校して53年目が終わろうとしています。

京都府は京都盲聾院が、明治11年に開設され、「特別支援教育発祥の地」とされています。しかし、本校が開校した頃は、知的な遅れや肢体不自由のある子どもたちを対象とした教育制度は、まだ整えられてはいませんでした。そのような中、府内全域の肢体不自由のある子どもたちを対象として開校した本校の教育は、まさに手探りでした。

そこからの50数年の間に、障害のある子どもたちの教育は、特殊教育から特別支援教育へと大きく進展し、そして、今は、共生社会の実現をめざし、障害のある人もない人もともに学ぶインクルーシブ教育システムの構築を様々な校種の学校や地域社会と協働しながら進める時代となりました。

私たち京都府立向日が丘支援学校は、こうした時代背景の中、文部科学省特別支援教育に関する実践研究充実事業（新学習指導要領に向けた実践研究）研究指定を受け、「地域社会との協働の下で創造する『喜びをともにする授業』～多様性は可能性～」を研究テーマに、2年間、全ての学級、全ての教職員の力を結集して研究を進めてきました。

研究を進める過程において、私たちが大切にしてきた言葉の一つに「社会貢献」があります。

私たちの学校は、「障害がある」とされている児童生徒が学んでいる学校です。しかし、子どもたちと接していると、全ての子どもたちには、「障害がない」とされている子どもたちと同様に無限の可能性のあることを日々発見し、感動を覚えます。その可能性を最大限に伸ばすこと、そして、その素晴らしさを一人でも多くの地域社会の人と喜び合うことを目標にして、私たちは、新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業改善、教育課程改善を進めてきました。そして、その先にある多様な「社会貢献」の姿が、これからの社会においてこれまで以上に大切になる人間が本来もっている素晴らしさを確認させ、人と人をつなぎ、全ての人が幸せに生きる社会の創造への一歩となるのではないかと信じています。

末尾になりましたが、私たちを研究協力者として支えていただきました大和大学教育学部教授 落合俊郎先生、立命館大学産業社会学部教授 青山芳文先生、お二人の御協力がなければ今日の私たちはありませんでした。また、研究報告会で大変お世話になったNPO法人支援機器普及促進協会理事長 高松崇 様、NHK大阪放送局制作部チーフ・プロデューサー 森下光泰 様、そして、私たちをいつも応援して下さった保護者の方々、地域社会のたくさんの方々から感謝を申し上げ、巻頭の御挨拶といたします。

京都府立向日が丘支援学校 校長 平岡克也